

特115

749

集 露 草

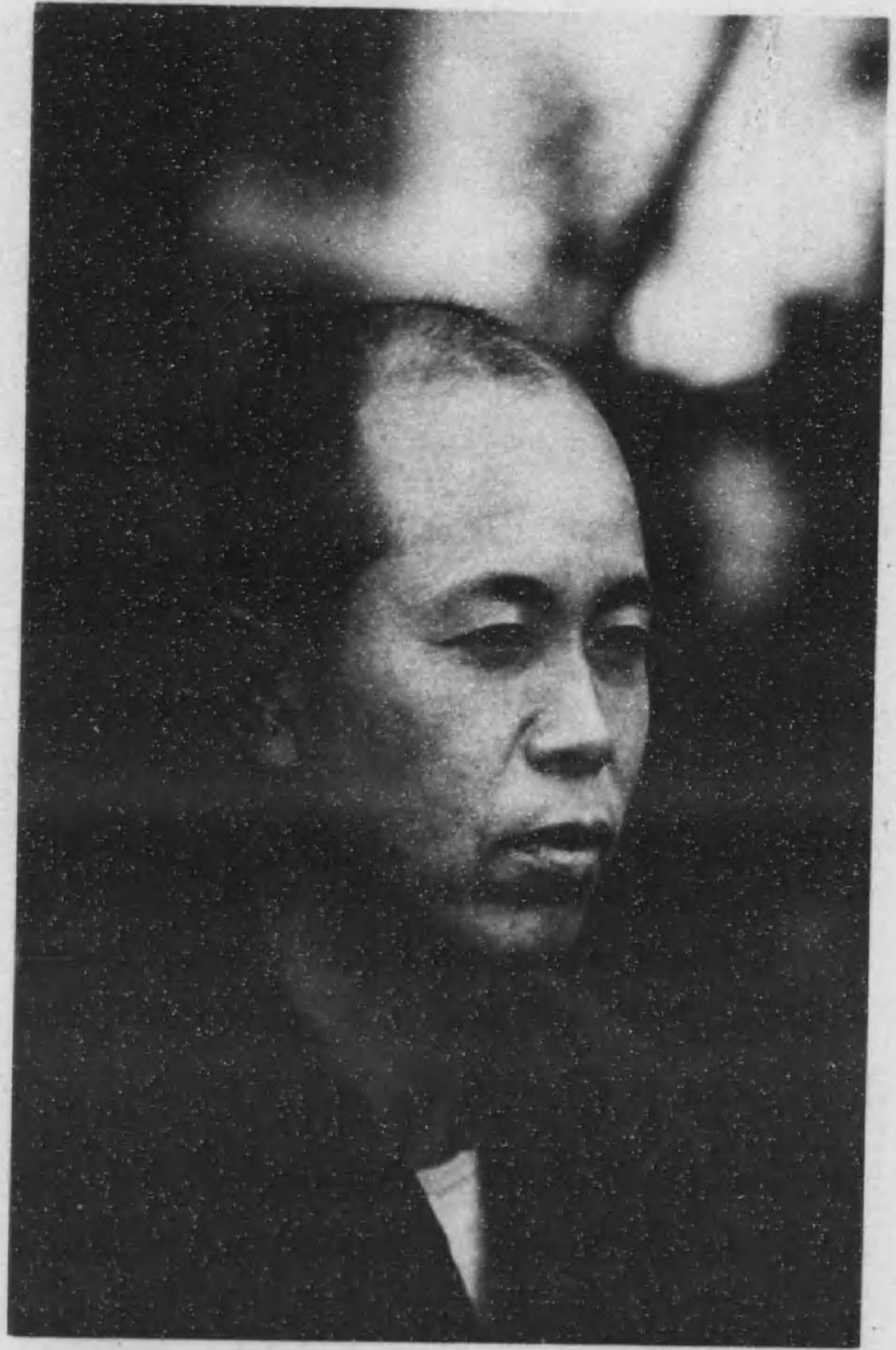


始



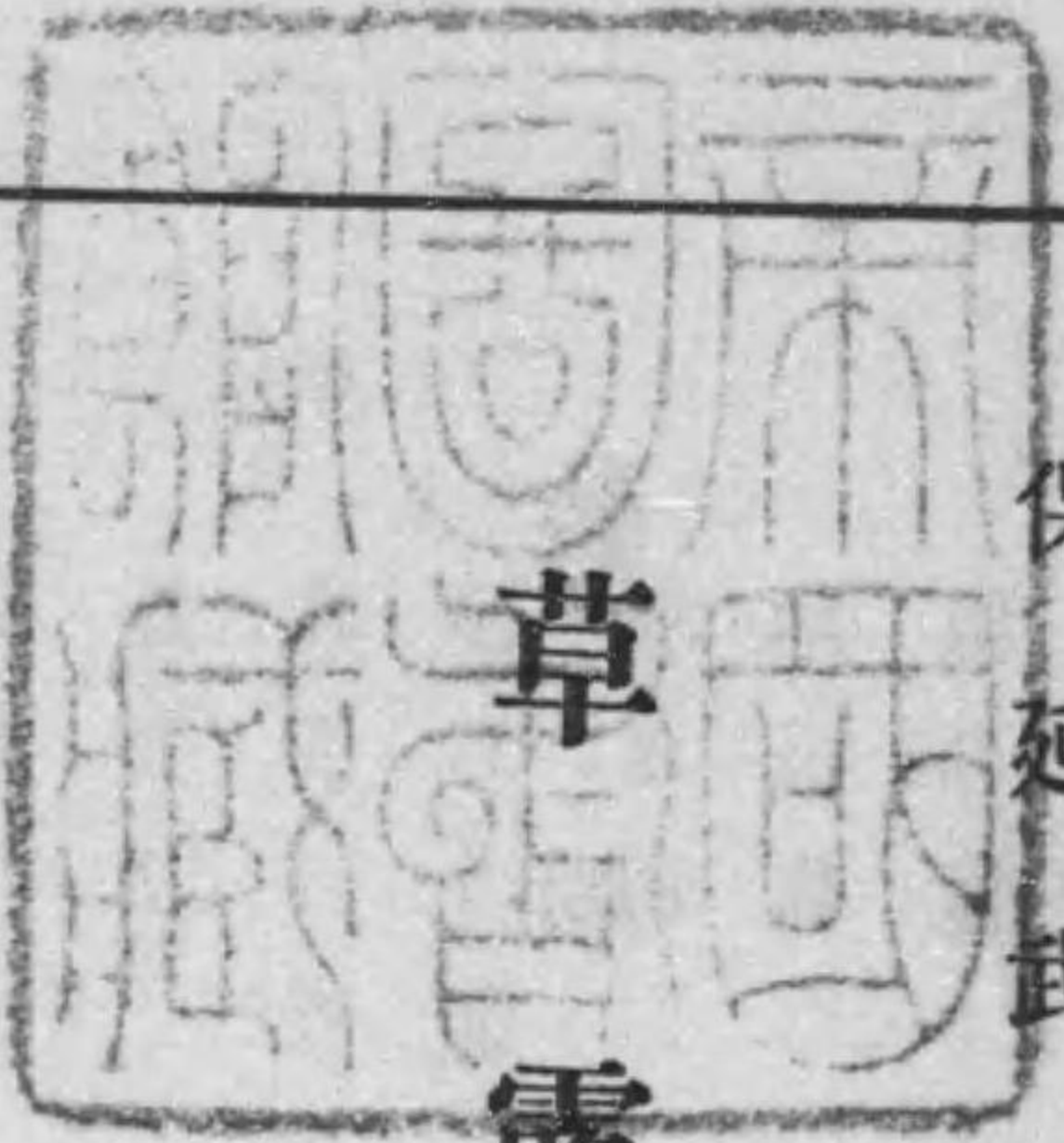
4315
749

（てに苑光寂）照小の者著



211
P. 11

養善の日照 (録漢英二丁)



保延武司著

草露集

寂光苑發行

寂光苑叢書第四篇

大正
15. 3. 13
丙午

赤い薔
林の鳥
ある朝
枯れた蓬
春のいき
道ばた
春雨
八ヶ岳

目次

九 八 七 六 五 四 三 二

装
幀

伊
藤
登

青
菜
畑
上
川
の
流
百
日
紅
友
の
手
ゆ
う
べ
青
い
草
赤
い
酸
漿
足
う
ら
中
庭
窓
を
開
け
て

一
〇
〇
一
二
一
二
一
三
一
四
一
四
一
五
一
六
一
七

お
ね
道
水
そ
こ
野
茨
草
の
芽
途
上
躍
る
草
の
芽
泉
緑
の
朝
お
静
か
に
ほ
ね
お
り

一
八
一
九
一
九
二
〇
二
一
二
二
二
三
二
四
二
五
二
六

雨の煙る日
地いき
青空
霜溶くる朝
野苺の木
土の庭
土に歸る露
ひよこ
おねの花
新しい土

二七
二八
二九
三〇
三一
三二
三三
三五
三六

微笑
河原の火
日蔭道
北側の窓
日照り雨
朝の匂
赤い日
桐の花
代車
堇

三七
三八
三八
三九
四〇
四一
四二
四三
四四
四五

草露集

雨晴れの朝

豚車

山ざくら

河原地

萌黄なすおね

地に歸る花

ぼぶらの木

つゆ草

書信

四六

四七

四八

四九

五〇

五一

五二

赤い蕾

日あたりのよい庭には
朝から春らしい日があたつて居る
春にさとい草の芽はどたづね歩いて見たが
まだ一つの芽も見せて居てくれなかつた
石炭がらいんくびん
長い冬の雪の下に居たぼろぐづまでが
皆たのしい春の日を吸つて居る
待たれた春が来たのだ

来つゝあるのだ
ひろい／＼青空のもと
私はしばらくたつて居たが
ふと見ると傍の梢の紅梅の芽が
紅梅のつぼみが
ほんのり赤くふくらんで居た

林の鳥

雪の降る日の
長峰の林に鳥が鳴いて居る

かなしい聲に鳴く鳥の
すがたは見えず
ばら／＼と雪の降る日の
長峰の林に鳴くは
春待つ小鳥

あ　る　朝

林へ行つてごらんなさい
まだ苔芝には雪がところ／＼残つて居るのに
もう春らしい日の光と

冷めたいけれど何處か春らしい風が
肌をさすつては通る
小鳥の鳴く聲はたのしそうに
雑木林の彼方の青空には
白い雲がふわり／＼と浮いて居る

枯　れ　た　蓬

渡廊下の傍の
雪のまばらな赤土に
枯れたよもぎが

じつと並んでゆれて居る
お日さますきと見えて
皆おつむり傾けて
じつと並んでゆれてゐる

春のいき

落ちついた畦のくろに
青い芽が呼吸をしてゐる
雨ざらしになつた草の葉がゆれて
とろ／＼とせぎの水は流れて行く

水かけ田の稻株はしみ上り
赤い根をさらしてゐる
春をさそう風が
もろこしの葉をゆする

道ばた

黄ろい苔芝のもと
青い草がじつと
春の日を吸つてゐる
澄んだ水が流れて

日がきら／＼光つてゐる

春 雨

露が二つ

青い草の芽

赤土の庭に

たがらしが

一本たつてゐる

八ヶ岳

何と云ふこゝろよい朝だらう

何と云ふこゝろよい日の光だらう

とたん屋根赤い土壁の上に

八ヶ岳が見える

どつしりおしりをすえた八ヶ岳

明けた窓から見える八ヶ岳

風にゆれる枯れたよもぎの

向ふに見える八ヶ岳

青菜畑

田のくろの青き畑は石垣の上にひろがる
眞青きは春の日を吸ふ青菜のはたけ
くもり空土くれ起す耕人の彼方につどく
だんだら畑の青菜のはたけ

上川の流

流れよどみてふちとなる

上川の流に春潮たどよふ

流るゝまゝに

ぬくまるまゝに

汀なる椶の梢の色づきにけり

流るゝまゝに

ぬくまるまゝに

枯あしの砂地にして

青き草かも

上川は流れくいて

つくことなしに

百日紅

長峰のをかぞひにして
百日紅の樹肌さめたり
道行きつ
霜溶くる音聞く寂しさよ

友の手

友の手の少し太りて

爪の垢黒く残れり
草の根をかみて味あり
香の煙に心はなごむ
たらちねの嬰兒のはは
まだいえなくに

ゆうべ

土壁に夕日は寂し
家織の前かけゆれて
日は暮れにけり

青い草

湯の町の
水は流れて草青し
草山の上の
冷めたき月かげ

赤い酸漿

くもり空

冬ばけした赤土に
並んだ青い草の芽
枯草のなかに
ほほづきが一つ落ちてゐる

足うら

柔き足うらにして
長峰の春をしぞ知る
くろき土しろき山
青空にして雲雀鳴き

をかのうねりの青松の
雑木林に焚くけむり

中庭

赤いさかをした黒い鶏が
まだ土をかいて餌をあさつてゐる
日のあたゝかい中庭の
かたるばの木へ鶺鴒がどまり
一羽の雀は長い糞しぼをひいて行く
紅梅の蕾がほころびそめて

お池の水へさぶなみがたつ

窓を明けて

窓をあけませう
何と云ふ今日はいゝ青空だらう
西のなだらかな山並の雪は消えて
峠を春のおん馬がのぼつて行くやうだ
窓をあけませう
何と云ふ今日はいゝそよ風だらう
窓をあけて冬に疲れたお部屋へ

春のいきを吸ひこませませう

たね道

長峰のおねみちづたひ
野苺の木肌赤らみ
桑の木の梢は青し
日の照れば草露光り
風なきに土に歸れり
白雲は青空に湧き
傍の雑木林に鳥鳴きやます

水そこ

春の日にぬるむ水田の水底に
並んでうつるけやきの木
こすゑの細い青空に
大きく明るく日がうつる

野茨

野茨の赤い實はいつか色あせて

青い芽がのびた
ちよんくく枝へ並んだ青い芽
降ることもなしに小雨が来て
露が二つ仲間入りをして居る

草の芽

枯草の上へ小雨が降る
しとくと思ひも濡れるやうに
小雨が降る
枯草のなかの青い芽

小さい草の芽は
土の中から一ぱい生えて来た

途上

快よくわが身は動く
道行けば草は青しも
鳥鳴きて豚はころがり
まやごえの匂ひよろしも
桑の芽のうす青みして
荷馬行くなり

躍る草の芽

枯草の下

青い芽が一ぱい出て居る

土のお乳吸つて

お日さまにぬくめられて

青い草の芽が一ぱいのびて居る

ふみつけられても

雪が降り霰が来ても

じつところらへて楽しい春を待つて居た

草の芽は皆嬉しそうにおどつて居る

泉

道ばたに泉流れて

日にぬるむ

青い草の葉

草の根を洗ふ泉の

石くれに苔は萌えつゝ

青みどろ

とろ／＼と泉流れて

思ひつきずも

緑の朝

眼つぶりて林にたてば

緑に匂ふ草の色

苔芝の緑のしとね

空青みかも

木々のいきづき

お静かに

お静かにして下さい

あしたかなづる林の小どり

林の木は瞳をつぶつて徐ろに考えて居ます

草はだまつてのびて行きます

土も黙つてお祈りをして居ます

けたましくさへづる百舌鳥の聲も

いつか大地のうに溶け入つて

くゆり香ゆかし緑のひろはら

さえし瞳の青空も
あまねく光る日輪も
大天地の一時ゆ
しどまに居りていとなみしつも

ほねおり

畑となかよくほねおりにけり
桑の株ほりてかえせば
黒光る虫いでにけり
地にまかす心思へば

青草はつむに由なし
桑株の根もたてなくに

雨の煙る日

しつとり濡れた長峰の
苔芝の道のこゝろよさよ
川窪の流れ渡れば
鳴くみそさどい揚雲雀
雨がけぶつて道がぬかるむ

地 いき

雨あがり
ま土の庭に地いきあがり
おどりさまよふ子ども等の
姿もおぼろ
雑木林のうねりもおぼろ
雨あがり
日はかどやきて大空を
鳥鳴きわたる

青 空

瞳ひらけばまろ山の上に
きはみなき青空あり
青空に日はかどやき
澄める水には木かげうつる
土に居る草のいき
道に居並ぶ石のいき
草屋根の上にたつけむり

霜溶くる朝

にたりくど
おね道の霜溶くるなり
霜溶くるま土おねばら
道ゆけば
檜木のわかば
をかのうねりに微風たちて
上川の流はひどく
朝のをかに

野苺の木

小さい蕾をもつた
野苺の木が
大崖の際にたつてゐる
あの白い花が咲いて
赤い實のなる野苺
赤土よくづれるなよ

土の庭

お早うと重ねて云へり
土に居る朝の子供の瞳さえたり
土の庭にすがくしきよ
朝日のかどやき

土に歸る

露の生命は

風にゆられて
野茨の木肌青みぬ
風吹けど露は落ちず
風なきに静心かも
土に歸りぬ

ひよこ

黄ろい嘴をして
あどけない眼をして
ひよこが餌をひろつてゐる

じつと見てゐると親鳥が
こゝと地べたへ嘴をつけるやうにした
ひよ〜〜ひよこは
ほんとに可愛よくひよ〜〜
やはらかい眞土をふんで
やはらかい青草を食べたり
お水をす〜り上げるやうに飲んだりする
朝の日はあたたつて
かたはらに露じめりした
すみれの花が咲いてゐる

おねの花

曇り空いつしか晴れて
雑木林の草むらに
春の日を吸ふ木苺の花
日向ごの芝地にはみついた
赤い〜地梨の花
風なきに花がゆれる
日が照れば花はほ〜えむ
青空にたゞよふ白くも

新しい土

ばらの木の下に
鶏が土をほつてゐる
しめつぼく新しい土に
かげがして
こゝと鶏は鳴く
柔かな根があらはれ
かげがゆれる
くろ土の上に赤い實が

一つ二つ落ちてゐる

微笑

ほゝゑめば子等もほゝゑむ
雨あがり緑の朝の日のかどやき
ほゝゑめば子等もほゝゑむ
並び居る涼しきひとみ
雨あがり緑の朝の日のかどやき

河原の火

赤き火は河原地をやき
白き煙は向ひのをかに流れたり
うすれ日の午後の一とき
川なりのして草ゆらぎすも

日かげ道

おどけくも

雑木林の日かげ道
枯あしの穂並ゆらぎて
川窪の小山田青し
鳴の聲すも

北側の窓

たまには北側の窓も見て下さい
赤い土壁のした
石垣のうへ柳の芽はのびて
今に桐の花も咲きませう

日がだんぐ長くあたるやうになつて
日かげの土の草の芽も
春のいきをするやうになりました

日照り雨

日照り雨
晴れて明るき長峰の
をかのうねりに春風わたる
草露はほろりと落ちぬ
雑木山の木がくれにして

立科ははだへまろらに
動かず居れり

朝の匂ひ

小雨あがりの
長峰の道の煙の青さよ
吸ひつけし煙草の匂ひ
雑木林に鳴く鳥の
朝の匂ひよしばし佇む

赤い日

赤いまつかい
とけ入るやうなお日さま
風のない夕の
水田に蛙鳴き
おどろき見入る
子どもだちの後の
白壁の赤さ

桐の花

五月となれば
桐の花
うすむらさきに
咲きにけり
寂しくあれど
誰にかつげむ
唇あてゝ
泣き入りにけり

代 車

川くぼの水田のなかに
代かき車の朝鮮牛が
赤い灰ぼつたい朝鮮牛が動かない
みのを着た農夫が車臺から
これ／＼と云ふ
足を片足あぜへあげたりした牛が
またのろり／＼と動き出して
若葉の間に代かき車の輪がまはる

びしよ／＼と水をけて
青草の土手について牛は動く
水底にこぼとねりこの花が映つて
しづ／＼と小雨が降り出した

す み れ

曇り空風鳴りやまず
おねづての雑木林の芽は萌えにけり
草ゆるゝ土手かげにして
ほのうすき薄紫の

すみれの花はゆれ動きつゝ

雨晴れの朝

雨晴れの朝は静かに
土ぬれて木かげ動かす
緑色よき落葉松の
雑木林に鳥は鳴く
桑の芽の朝のびたり
青空のもと
日を吸へるたんぼゝの花

豚車

にはかに桑の芽がのびて
落葉松の緑が濃くなつて来た
青い葉に白い大根の花
長峰のしめりを持った道を
豚をつけた荷車が下つて行く

山さくら

伐り倒されたをか
の林に
山さくらが一本
咲いて居る
新しい木の匂ひが
して
やはらかい春草の
肌ざはり
鳥が一羽じつとこ
まつて居る

河原地

春あさみ

河原地にして日は
照れり
風吹けばまごも枯
あし
風のまにゆれ動き
けり
はんの木
の青空にして
立科に白き雲湧き
日は麗かに

萌黄なすおね

朝露に濡れしおね
みち

桑の芽の萌えて明るく日は照れり
道行けば川窪澤に鳴く鳥の
かつこう鳥を聞くからに
春もいつしかゆかむとすらん
菜の花の黄ろく土に

地に歸る花

風もなき静かなる夕
桐の花ほろゝと落ちぬ
しめりもつ夕の土に

桐の花また一つ落ちぬ

ポプラの木

遠くから見ても
一本高いぼぶらの木
柔かい若葉は
つやゝかにひかり
風のまに／＼ひるがえる
青空のうち屋根の上
若葉のぼぶらは花さかり

つゆ草

枯あしの河原の土手に

よしきりの聲はさびしも

つとたてば

足もとにして露草の

露草の花咲き居れり

曇り日の河原砂原

露草の花見て居れば

吾はさりがてに

書 信

東京にて島崎さん。二月へ這入つて山の上にて何處か春が目覺つゝあるやうな感觸を持ちます。まれに雪の少ない今年は、日のうらゝかにあたる青い空、ニタリ／＼と溶けるぬかるみ、道ばたの土手や流れのはたの草はもう青んで小さな芽——蕾がもう春の先驅をして居るやうに思へます。そんな時私は私は小さな詩篇草露集の上梓がかないまして、あなたのお膝もとまでお届け出来るやうになりました。たことを嬉しく思ひます。

この詩篇の多くは私の生家から毎日まるる學舎へ、その自然のうちに享けました感觸でありまして、自然そのものゝうちに目を覺し滲み込まして戴きました歩行の表徴であります。

まだ一度もお逢ひすることのない島崎さん、私はこうしてこの詩篇を編み詩想に浸りながらも、あなたがまだ小諸にお居でになる頃戴いたおたよりを想ひました。世相さまざまな生活に居らせらるゝあなたは其時のことなど記憶なされては居られまいと存じますが、其頃私は詩篇上梓のことを思ひたつてゐたのでありません。すぐれたる果實は果實そのみにて足る。獨立獨歩して詩歌の國に行かれむことを望む。如何にもあなたらしい言葉を私は深く胸に覺へてまゐりました。

島崎さん。私は戴いたおたよりあなたの上梓なされた御本によつて千曲の川べりや、小諸なる古城のほとりに美しくいあこがれを持つて居りました。あなたの寫生にもある寥科山や八ヶ岳、高い山の峠一つ越せばまゐられる裾野の村に生活して居りながら、漸く山越えをして千曲の川べりへまゐつたのは、今から七八年前湖傍の町から山裾の村へ移つた年でした。それは六月でした。峠の道は流れを渡り森林へ這入りました。森林の静思その洗浴を享けた私は傾斜面の雪道へ這入

りました。一人二人歩いた足痕、私は虔しい心に先縦の道を思ひました。至醇の泉は林間に湧いて居り、焼草原には蕨の芽が萌え出してゐました。馬流の宿、岩村田の雨、私はあなたが何年もく住はれた小諸の土を踏み、ひとり寂しくなつかしく懐古園の草芝に身体を卸しながら、千曲の流れを聞き、樹林の間に淺間の煙を眺めたりしました。

島崎さん。私はしみじみ人生を思ふ使徒でありたく思ひます。千曲の流れも人生そのものかのやうに流れて従つて平原の方へ旅してまゐりました。だんく流れが大河の趣になつてまゐりました。青うづまいて流れる飯山の大橋の上へたつて、春ゆかうとする山並の姿に思ひ入りもしました。あの静寂な寺院のほとり赤い灯をなつかしみ、山澤越して古間の驛場に一茶の生活を思ひ耽りもしました。島崎さんそうして私はさまざまな生活の裏に新しい生命の目覺めを祈念しました。寂しさに居りながら惱みに居りながら、人知れず思ひを自然のふところに、

自然に居る一切のものに、そこに生れ出たものがこの小さな貧しくつたないこの叢書——詩篇であります。私はこの小さな詩篇を新しき詩のためにゆとりある燈火をかざし給ひしあなたのふところにお贈り致したく思ひます。この山の上も冬の胎に居りながら春日まさに目覺めむとしてゐます。迎春の心ますくあなたが健かにあらせられむことを祈りながらこの書信を結びます。

二月十二日

思ひあますほどにしてゐた詩篇草露集の上梓がかなひ人々のお膝許におくり得ますことを忝けなく思ひます。

私はこの仕事に居りながらその内省を深めることによつて、私そのもの、稟質の乏しさと精進の至れなさを深く思はせました。至らむとして至れぬ心其もどかしさ、私は自ら遺稿を編む心をと所念しながら、かく拙なく貧しきもの、み上梓いたせしこと冷汗身を洗ふ次第であります。一切を焚き盡してその灰燼のうち

新生の目覺めを祈念致します。

顧みて唯感銘措く能はざるは、この叢書刊行のために勞作を賜はり、未知既知の諸友が愛顧を垂ひ給ひしこと終世忘れまじく、今生相ゆるされし所縁今後もますます御指教を賜りたく存じます。

卷頭小照は十二月某日かつて生活を偕にせし一人の攝形にかゝり、庭畑芋掘りの勞働に従つて居つた時です。私はこゝに更生の心切なる首途にたつて、人々に私そのもの、心その小照を挿附しておゝくりします。

二月十四日

草 露 集



大正十五年二月十五日印刷
大正十五年二月二十日發行

定價二十五錢

著者兼 保 延 武 司

發行所 長野縣諏訪郡玉川村三五八六
寂 光 苑

印刷者 長野縣諏訪郡富士見村三五八五
小 川 久 喜

發賣所

東京市神田區
南神保町十六

岩 波 書 店

高 原 堂 印 行

寂光苑叢書

- | | | | |
|-----|-------|-----|---------|
| 第一篇 | おくりもの | 童話集 | 定價金二十五錢 |
| 第二篇 | 生命の木 | 童話集 | 定價金二十五錢 |
| 第三篇 | 洗身の旅 | 印象記 | 定價金二十錢 |
| 第四篇 | 草露集 | 詩集 | 定價金二十五錢 |
| 第五篇 | 土の言葉 | 童話集 | 定價金三十錢 |
| 第六篇 | 小さな火 | 物語 | 定價金二十五錢 |

終

